



Title	玄応音義に関する研究史と課題
Author(s)	李, 乃琦
Citation	研究論集, 16, 85(左)-98(左)
Issue Date	2016-12-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.16.l85
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63911
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_008_Li.pdf



玄応音義に関する研究史と課題

李 乃 琦

要 旨

玄応音義は、完本で 25 巻、約 9,430 の掲出項がある。玄応音義は現存する最古の仏典音義であり、唐代初期の漢字音が反映されていることから、中国語学で重視されている。さらに、450 以上の仏典を収録することから、当時通行していた仏典の種類や内容を知る手がかりとして、仏教学においても重要なものである。玄応音義には主に日本の写本（手書き）と中国の版本（木版印刷）が現存する。またフランス・イギリス・ドイツ・ロシアには敦煌・吐魯蕃から渡来した古写本の断片群が保管されている。従来、玄応音義中国版本についての研究が盛んにされてきたが、それに対して、玄応音義日本古写本については、未だ研究する余地が大いにあると言える。

よって、それを含めて調査を行い、玄応音義の日本古写本を検討する必要がある。本論文は、主に中国に現存する玄応音義版本における先行研究をまとめ、それにより、日本古写本の研究方針を定めることを目的とするものである。

1 はじめに

玄応音義（玄応撰『一切経音義』）は中国に現存する最古の仏典音義である。唐代に編纂され、後代の仏典音義¹ に大きな影響を与えた。日本には奈良時代に伝来した後、盛んに書写された。また、平安時代以降の辞書編纂に際して頻繁に利用された。

中国では玄応音義の版本が数多く現存し、それに基づく研究も盛んにされてきた。それに対して、日本に現存するのは版本ではなく古写本であり、1925 年に 1 種類（正倉院本）が公開されていたが、他の写本は 1981 年に 3 種類（大治本・広島大学本・天理図書館本）、2006 年に 5 種類（七寺本・金剛寺本・西方寺本・東京大学本・京都大学本）がようやく公開されたばかり

¹ 雲公『大般涅槃經音義』、慧琳『一切経音義』など。

である。これらの写本に関する研究がほとんど未着手である。上田(1981)は、1925年と1981年に公開された4種類の写本と中国版本とを対照し、日本古写本の系統分類を試みた。その後、佐々木(2014)は2006年に公開された新たな5種類の写本も含めた玄応音義巻第五について、諸本の系統を分析した。しかしながら、系統分類については、巻五以外の巻も含めた玄応音義全体を対象とした系統分類は未だ行われていない。

よって、それを含めて調査を行い、玄応音義の日本古写本を検討する必要がある。本論文は、主に中国に現存する玄応音義版本における先行研究をまとめ、それにより、日本古写本の研究方針を定めることを目的とするものである。

2 玄応音義について

唐代に玄奘はインドから大量の仏典を将来した。それらの仏典を翻訳するために、長安に「訳場」を設立し、僧侶の中から知識人を選び、仏典翻訳を始め、玄奘は「訳場」に唯一の「字学大徳」として仏典翻訳に参加した。それと同時に、仏典に難字難語が多数存在するのを意識して、玄奘は「一切経」の音義の編纂を始めた。それがいわゆる玄応音義であり、全25巻で約400,000字、400部以上の仏経経目と9,000以上の項目が収録されている。

次に玄応音義の一項目を挙げる。

例1 〈檻褸〉 卷第十二 雜寶藏經第四卷

古文檻，又作縑，同。力甘反。謂衣敗也。凡人衣破醜弊皆謂之檻褸。經文作藍縑，非體也。

この例では、掲出語が〈檻褸〉であり、傍線部分が字体注、波線部分が音注、二重傍線部分が義注である。玄応音義の掲出語は主に二字熟語で、その中の一字のみ注を施す場合でも掲出語は二字とする。字体注は主に字形を弁別し、古字・異体字・通字も明記する。また、經典原文の用字の正俗も分別している。音注は主に反切で表し、類音注を使う場合もある。多数の発音がある字については、別々に音注を記している。義注は主に典籍に依拠して引用するものである。多数の意義がある場合、別々に対応する義注を記載する。

3 玄応音義の成立研究

玄応音義の成立年代については、いくつかの説が存する。劉葉秋の『中国字典史略』と林玉山の『中国辞書編纂史略』、錢劍夫の『中国古代字典辞書概論』は「唐太宗貞觀末年完成」と論じた。山田孝雄の『一切経音義刊行始末』では貞觀末曆(649年)に成立したと推測されている。神田喜一郎の『緇流の二大小学家一智鷲と玄応』では龍朔元年～三年(661～663年)、陳士強の『佛典精解』で永徽六年(655年)～龍朔三年(663年)と推測する。徐時儀の『玄應「眾經音義」

研究』は龍朔年間（661～663 年）、于亨の『玄応「一切経音義」研究』は 663 年と論じた。

4 玄応音義の系統研究

徐時儀（2005）は、玄応音義の 10 種類の写本と版本を取り上げ、収録された仏経数、掲出語数、注文の異同を比較し、玄応音義を二つの系統、すなわち、磧砂本系統と高麗本系統に分けた²。さらに、敦煌文献と慧琳音義との依拠本が高麗本系統に近いと推測した。玄応音義の系統に関する徐氏の見解は図 1 のとおりにまとめる。

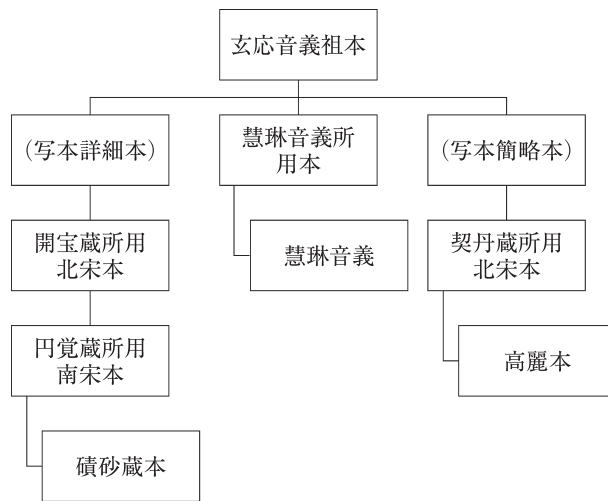


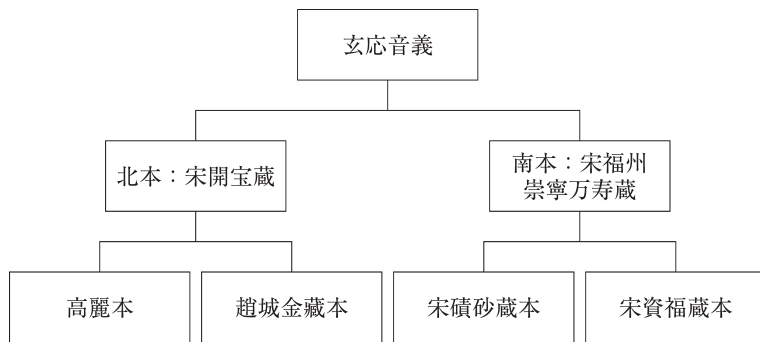
図 1 徐氏における『玄応音義』系統表³

一方で、于亨『「一切経音義」版本考』は、書写形式・字体・注文・掲出語・経目の五つの分野における系統分類を試みた。さらに、高麗本・趙城藏・磧砂藏・永樂南藏を詳細的に分析した。于亨は徐氏と同じく、中国に現存する玄応音義を「磧砂本」と「高麗本」の二系統に大別する。しかし、系統の祖本については結論に相異がある。

以上の先行研究により、中国に現存する玄応音義版本はほぼ高麗本系統と磧砂本系統に分けられた。さらに、版本系統の祖本と成立原因については、二つの説が存する。徐氏によると高麗本系統の祖本は契丹藏、磧砂本系統の祖本が開寶藏で、系統が異なるのは依拠本が違うためである。それに対して、于氏によると、高麗本系統の祖本が開寶藏であり、磧砂本系統の祖本が崇寧藏である。一方、徐氏は趙城藏が開寶藏の覆刻本であり、その中に契丹藏の内容も一部

² () に書いている本は推測上のもので、現存しない本である。

³ 徐時儀（2005）

図2 于氏 (2007) における『玄應音義』系統表⁴

分存在し、高麗本は開寶藏を手本として、契丹藏を元に校合したものであると論じた。崇寧藏も開寶藏に基づいて成立したものであるという。李富華・何梅 (2003) では趙城藏と契丹藏との間には関連性がなく、趙城藏が完全に開寶藏を利用したとされている。そして、趙城藏と高麗本系統の相似性は、両者がともに開寶藏を祖本としているためであるという。以上のように、系統分類については見解が分かれており、高麗本の成立経緯や、契丹藏が玄應音義版本の各本に利用されたか否かについて、まだ検討の余地がある。

また、許建平『杏雨書屋藏玄應「一切經音義」殘卷校釋』は、杏雨書屋藏殘卷を高麗本・磧砂本・慧琳音義の玄應撰部分と比較し、杏雨書屋藏殘卷が慧琳音義の玄應撰部分と相似性が高いと論じた。また、他本と比べ、殘卷が独立的な系統に属することから、慧琳音義の玄應撰部分も独立性を持つ系統と推測した。しかしながら、杏雨書屋藏殘卷の項目数が限られている上に、慧琳音義と対応する項目数はさらに少ないため、結論についてはまだ研究する必要がある。

佐々木勇「広島大学新収石山寺本『玄應一切經音義』卷第十承安五年写本」は新収の石山寺本玄應音義卷第十承安五年写本について紹介し、本文の書式・目錄經名・本文經名および本文を諸本と比較した。その結果、高麗本・宋版とは異なる系統に属して、日本古写本系統であることを指摘した。

このほか、徐時儀『玄應和慧琳的「一切經音義」研究』は、日本に現存する玄應音義古写本の系統を検討した。収録された経目においては、金剛寺本・七寺本・西方寺が高麗本と同じ系統であり、注文においては、七寺本が高麗本に近く、西方寺本・金剛寺本が磧砂本に近いと論じた。また、徐氏は元々開寶藏初刻本と契丹藏との間に一種類の玄應音義古写本が存し、日本現存の写本はその古写本に基づいてできたものであると論じた。その上で、西方寺本・金剛寺本が先に成立し、その後、高麗本と七寺本がそれらを底本として編集されたと論じた。筆者は日本古写本の系統については研究途上であるが、徐氏の研究結果には再考の余地があると考え

⁴ 于亨 (2007)

ている。それについては後稿を期したい。

5 玄応音義の校勘研究

蔣禮鴻は海山仙館叢書本玄應音義を校合し、『玄應「一切經音義」校録』を発表した。蔣氏は他の版本が入手できない状況で、文脈や他の書籍との照合を通して、海山仙館叢書本の間違いを指摘した。しかしながら、参考できる書籍に限られているため、修正されていない部分も存する。

周祖謨の『校讀玄應一切經音義後記』では、曹鑑本と磧砂本とを校合した。しかしながら、論文では巻第一の数条を分析しただけである。また、校合するのは同じ磧砂本系統に属する両本に限られていて、高麗本系統には言及していない。

徐時儀の『「一切經音義」三種校本合刊』は現在玄応音義の校勘に関する最も詳細な研究である。ここでは高麗本に基づき、他の版本、敦煌・吐魯蕃断片群、日本現存写本、慧琳音義の玄応撰部分を参考にし、巻ごとに巻末に具体的な校合内容を記載している。しかしながら、引用典籍についての検証が不足している部分がある。今後筆者が日本古写本を校勘する際にも、徐氏の研究成果をもとにするが、前述のような筆者の判断とは異なる点もあるため、注意して利用したい。

張涌泉の『敦煌經部文獻合集』では、俄敦 583 号残卷、俄敦 256 号残卷及 P.2901 号残卷について校勘した。それらをそれぞれテキスト化した上で、磧砂本、海山仙館本と慧琳音義の玄応撰部分とを対照し、これらの敦煌・吐魯蕃断片群に玄応音義の祖本の内容が存することを指摘した。敦煌・吐魯蕃断片群は日本古写本と成立年代が近く、内容もほぼ一致しており、日本古写本の研究に際して、重要な資料である。しかし、張氏は校合に際して、日本古写本と関係が深い高麗本を使っていないため、その点を補いつつ研究を進めたい。

このほかに、玄応音義を校勘資料として利用している書籍は多数ある。例えば、任大椿は玄応音義に基づき、『「字林」考逸』を編集した。さらに、玄応音義に各書籍の逸文をまとめ、『小学鉤沈』を編纂した。

6 玄応音義の音韻研究

周法高は玄応音義の反切により、玄応音義での発音が7世紀前半首都である長安音によるものと推測した。さらに、王力は玄応音義の反切に反映された音韻系統が陸法言の『切韻』とかなり異なると指摘した。この後、王氏の研究に対して、周氏が『玄応反切再論』を発表した。この論文で、周氏は玄応音義音韻系統に関して両者の結論が異なっている原因を提示した。周氏は、玄応音義で使用されている声母と韻母の発音系統を復元し、音韻系統に関して両者の結

論が異なる原因を明らかにした。さらに、王氏は莊氏校刊本、周氏は高麗本という異なる玄応音義版本に依拠したことも原因としてあげられる。

その後、徐時儀（2005）が磧砂本と高麗本とを比べ、異なる反切を詳細に分析した。そして相異反切を次のように分類した。

- ① 字形が似ているので、反切が誤写になるものは130例以上ある。
- ② 反切の用字が異なるが、発音が一致するものは430例以上ある。
- ③ 掲出字が元々複数の発音を持つものは370例以上あるが、この中で、玄応音義に掲載される反切が現在調査した字書韻書と照合できない反切が多数見られる。徐氏によると、これらの発音は当時の西北方言であるという。これらの発音系統が唐代北方の詩歌や敦煌変文などと一致するためである。さらに、羅常培の『唐五代西北方音』によると「見群互注」，「精從互注」，「以匣注曉」などの発音系統と一致する。
- ④ 発音の変遷による反切が異なるものは200例以上ある。その中、声類の異なる反切が130例以上、韻類の異なる反切が90例以上、調類の異なる反切が20例以上ある。声類の異なる反切は輕重唇音声母異切，舌頭與舌上声母異切，精組與莊組声母異切，從母與邪母異切，泥母與娘母異切，娘母與日母異切，匣母與云母異切，影母與以母異切，牙音與喉音声母異切，清濁声母異切の10種類ある。韻母の異なる反切は遇攝魚虞模異切，蟹攝祭齊，灰哈異切，止攝之脂支三韻異切，流攝尤侯異切，咸攝覃談，盍合，銜鹽，銜添，咸覃，嚴銜異切，山攝仙先，仙元，元桓，寒先異切，臻攝欣真，物術異切，宕攝唐陽異切，梗攝麥陌，昔錫，清青，錫麥異切，假攝麻與蟹攝佳異切，蟹攝與梗攝入声近韻異切，止攝與蟹攝近韻異切，流攝與遇攝近韻異切，咸攝與山攝近韻異切，臻攝與山攝近韻異切，曾攝與臻攝入声近韻異切，臻攝入声與止攝近韻異切，江攝與通攝近韻異切，梗攝與宕攝入声近韻異切の19種類ある。調類の異なる反切は平仄異切，上去異切の2種類ある。

一方、玄応音義の音注において依拠した書籍に関する研究も出されている。唐蘭は、玄応音義が韻集を利用し、その韻集は呂静が編集した韻集ではなく、隋唐にできた韻集であったと論じた。それに対して、周法高は玄応音義が引用した韻集は呂静の編集したものであり、玄応音義では発音に注を加える場合、他の韻書を利用していなかったと述べている。太田斎は玄応音義と玉篇との反切を照合し、出典名が明記されていないものの、玄応音義は玉篇の反切を使用したと推測する。

徐時儀は玄応音義には韻集を引用する例があるが、韻集を参考にして音注を編纂していないと断言した。さらに、玄応音義には玉篇からの引用であることを明記する項目が一例しかなく、慧琳音義の玄応撰部分には存しないことから、後代の増訂と判断した。それにより、玄応音義の成立に際して玉篇を参考にしなかったと考えた。なぜ玄応音義と玉篇との発音系統が一致する部分が多いのかについては、梁代から唐代までの発音系統がほぼ変わらないからであると述べている。結論として、玄応音義の音注の基準において、玄応音義と原本系玉篇、切韻、韻集

との発音系統がほぼ一致し、これによって玄応音義では当時通用していた発音を利用したと解明した。

中国版本の音注については、このような研究状況であるが、日本に現存する写本について、音注の検討がされていない状況で、音注の由来について結論づけることは難しい。よって、筆者は中国版本には見られない日本古写本独自の音注の由来を検証したい。

7 玄応音義の語彙研究

玄応音義の成立年代は中古漢語から近代漢語に変わる時代である。当時、白話（話し言葉）の使用が盛んになり、元々広く使用されていた文言（書き言葉）の使用が縮小した。また、二字熟語が出現したことも一つの特徴である。徐時儀（2005）の統計によると、玄応音義の掲出語計 9,430 條（延数 7,960 條）のうち、外来語の 840 條と少数の三字掲出語を除き、残りはほぼ二字熟語である。徐氏は漢語に二字熟語が出現した内因と外因を論じ、玄応音義の編纂方針と関連性があると論じた。さらに徐氏は、玄応音義に編集されている方言を検討し、玄応音義の注文には「東西通語」と「南北通語」の記述が見られることを論じた。これは地域の表現ではなく、その時に通行していた言葉を指す。玄応音義の方言が使用されている地域を表す場合、ほぼ南方と北方との区別がある。「江南」に対して、「中原」、「関中」、「北人」などの用語があるため、その時代には南方と北方の方言に大きな差があったと推測した。また、玄応音義の記述によると、現在使われている言語の変遷も窺われる。最終的に、徐氏は玄応音義の 840 條の外来語に対して、語源と現在までの使用状況を提示した。

また、斯威爾は『從玄應「一切經音義」看漢語佛教翻譯中的俗語語音成分』において、Ksetra（切利）和 Stupa（浮屠）について考察し、玄応音義で翻訳された梵語の言葉が俗語語音学において重要な価値があることを論じた。

8 玄応音義の字体研究

王華權は『一切經音義文字研究』の中で、玄応音義の字体について論じた。

まず、玄応音義の中で、「古文」・「籀文」・「或體」・「經文」などの記述がある字を取り上げ、それらの性質・出典・特徴を分析した。「古文」で注を施された字が古代の字体ではなく、ほぼ同源字あるいは假借字であることと指摘した。

次に、玄応音義の字体と原本玉篇・龍龕手鏡の関係を検討し、玄応音義と原本玉篇に一致する内容が多く、深い関係があると論じた。一方、龍龕手鏡とは関連性がある内容が少ないので、両者には直接の関係がないことが明らかになった。

また、玄応音義の中から「正體」、「俗體」、「近字」、「通用」、「時用」、「今作」、「宜人」、「非

體」,「未見所出」,「未詳所出」などの用語と字体を抽出して分析した。その中、説文系の字書から引用した字を「正字」とする例が多い。玄応音義で施されている「俗」という注は「非」と同じ意味で用いられ、玄応は「俗字」に否定的な態度を持ち、玄応音義の編纂をとおして字体の正式な形を確定しようとしていたことが明らかになった。

玄応音義に「正體」「俗體」と並んで用いられている「通」という注は、当時通用していた字体を示し、龍龕手鏡における「通」の概念と一致する。ここから、王氏は龍龕手鏡の正字の下につけられた「俗」,「通」などの用語が玄応音義から影響を与えられた可能性があるとして述べている。また、玄応音義の「通」の字が伝統典籍の用字を利用したと推測した。玄応音義における「通」の判断は五經文字と同じであり、典籍における本来の用字を反映している。それに対して、玄応音義と干祿辞書との用字には大きな差があり、干祿辞書にある字が玄応音義ではほぼ「俗字」として扱われる。それにより、干祿字書にある「通字」は典籍から引用されたものではなく、典籍より後の時代に通用した文字であると推測された。

以上のように、玄応音義は説文系の字書に基づいて成立したものである。例えば、『古今字詁林』,『字林』,『字統』,『古今文字』,『字書』などの古字を標準として仏經經文の文字を判断する。經文には様々な用字があるため、玄応音義には用字の記述に際して、「非」という注を施された字が多く存する。さらに、容易に判断できない字が大量にあるので、それらの判断を保留とする記述が少なくない。例えば、「未見所出」,「義疑,故兩存也」,「未詳孰是」,「不審孰是」,「其義未詳」,「作者未詳」,「耳邊語也,未詳何出」,「字書亦無此字也」などがある。これも玄応音義の編纂において、編者が客観的で、厳格的な態度を持っていたためである。

最後に、文字の「六書」理論において、玄応音義の用字を分析した。結論としては、玄応音義では字体を解説する時、完全に「六書」理論を利用したのではなく、実際の用字から出発し、自身の認識に基づいて説明する。同時に、その時代のある『説文解字』から影響を受け、主観的な注文が多く存すると論じた。また、仏經經文の字義を合わせて、字体を判断する例もある。これも字体判断の社会性と伝統性に対する一種の反発といえる。

耿銘の博士論文『玄應「衆經音義」異文研究』の第三章では、高麗本と磧砂本の字体相異について論じ、両者の用字に大きな差があることを指摘した。そのうち、高麗本により多く写本の用字が残っているのに対して、磧砂本の用字が一定の規範性を持ち、統一された字体が使用されていた。

黄仁瑄『玄應「一切經音義」中的近字』では、玄応音義の39例の近字を考察し、それは轉注字、假借字、古今字、異體字和詞語化對音字の5種類の字であると結論付け、徐氏の『玄應「衆經音義」研究』で「新字」とした結論を否定した。

9 玄応音義の出典研究

于氏の『玄応「一切経音義」研究』は玄応音義の出典研究についての詳細な分析である。于氏はまず玄応音義で引用された書籍の書名と引用数を表に整理し、玄応音義の注文と各出典の原文との照合を行った（主に、説文解字、爾雅、字林、埤蒼、字詁、張揖難字、声類、韻集、韻略、広蒼など）。それにより、玄応音義が利用した典籍が主に字書であり、儒家の音義類書籍を引用する内容が少ないことを指摘した。さらに、玄応音義を原本玉篇、後代の仏典音義、經典釈文と比較した。

于氏の玄応音義と玉篇との関係についての論考には、太田斎の研究と一致する部分がある。于氏は玄応音義と玉篇とを照合し、玄応音義における小学書と儒家經典との注文が玉篇から転写されたものであると推測した。玄応音義では、前代の小学書を大量利用しているが、魏晋以来の引用が極めて少ない。この理由は玄応音義が編纂された時、玄応が出典の書籍を全部調べたのではなく、玉篇から一部分を転写したためであり、そのため、玄応音義の注文の形式や書籍の利用方法などが玉篇と似ていて、玉篇から深い影響を受けていると指摘した。

さらに丁氏は、玄応音義から後代の仏典音義への影響を論じる際、『法華音訓』と『大般涅槃經音義』を照合した。その結果、『法華音訓』ではそのまま玄応音義を書写した内容がある一方で、玄応音義に基づき、主に切韻と玉篇を利用して、増訂と修正を行った内容もあることが明らかにされた。また、『大般涅槃經音義』には玄応音義と一致する内容が多く存することから、編纂された時玄応音義を利用したと推測する。また、玄応音義と『大般涅槃經音義』の両者に掲載されている経目に関して、慧琳音義が転写する場合、玄応音義ではなく『大般涅槃經音義』を書写したものが多いため、『大般涅槃經音義』の内容がより詳細で権威性を持つものであったと論じた。その他、慧琳音義に見られる玄応音義からの引用を検証し、高麗本の玄応音義を書写する際に省略を行い、また後代の書写本に増訂があることを明らかにした。

丁氏の研究以前、陳垣と趙振鐸での研究では玄応音義が『經典釈文』を底本として成立したと論じられていたが、于氏は儒家經典音義としての『經典釈文』と仏典音義である玄応音義とを比較し、『經典釈文』が訓詁的で、玄応音義が字書的であるという両者の特徴を論じた。その上で、なぜ両者の性質が異なるのかについて、次の二つの原因があると述べている。すなわち、①『經典釈文』に収録されたのは漢代から南北朝までの經典であり、これは古代文言を訓詁的に分析するためである。玄応音義に儒家音義からの引用が極めて少ないのは、儒家音義が一家の伝承性を持つため、社会的な規範性が弱いからである。②『經典釈文』は音注を重視し、発音に基づいて意味を説明する。それは各經典の文章にはすでに注文が存するためである。一方、玄応音義は字体注と義注を中心にしている。音注は発音を表し、正規的な音韻を決める目的である。義注は典籍や小学書を利用し、詳細に仏典の難字難語を解説するものである。これは、難しい字を弁別することを目的としているからである。

このほかに、田潜の『一切経音義引説文箋』などの研究がある。

10 玄応音義の断片研究

小林芳規『「一切経音義」解題』は、ドイツに現存する5点の玄応音義断片について、断片番号、書誌情報と年代を簡明に紹介した。上田正(1981)は敦煌本を利用し、9種類⁵の玄応音義との比較を行った。その結論としては、敦煌本が「僅かしか残っていないので断言しかねるが、我が国に存する諸本と比較して、増訂と見るべき部分を発見できない。同じ系統と考えてよいであろう。」と述べている。石塚晴通の『玄応「一切経音義」的西域写本』では、ドイツに保蔵されている23点の玄応音義断片を詳細に紹介し、さらに書写形式と省略内容に基づいて、書写年代を推測した。荣新江の『中国国家図書館善本部蔵德国吐魯蕃文献旧照片の学術価値』では、ドイツの玄応音義断片と中国国家図書館に所蔵されている王重民の写真版の関連性を提示した。西脇常記の『ドイツ将来のトルファン漢語文書』では、ドイツに所蔵されている断片を詳細に翻字した上で研究した。主に玄応音義断片と高麗本との照合を行った。そのほか、日本龍谷大学図書館に「大谷探検隊」が敦煌から将来した玄応音義断片が多数所蔵されている。張娜麗の『西域発見の文字資料(四)』では大谷文献の玄応音義断片を確認した。刘安志、石墨林的『「大谷文書集成」佛教資料考辨』、刘安志の『「大谷文書集成」古籍写本考辨』でも大谷文献にある玄応音義断片についても考察した。黄文弼の『吐魯蕃考古記』、『旅順博物館藏新疆出土漢文佛經選粹』、『吐魯蕃柏孜克里克石窟出土漢文佛教典籍』では、今まで注目されていない玄応音義断片が多数公開されている。高田時雄の『藏經音義の敦煌吐魯蕃本と高麗藏』はロシアに現存する6点の玄応音義断片がドイツのCh/Uの断片群と同じ写本であることを明らかにした。徐時儀の『敦煌写本「玄応音義」考補』では、玄応音義の敦煌・吐魯蕃断片群を磧砂本、高麗本、慧琳音義の玄応撰部分とを簡潔に校合した。

敦煌本玄応音義の多数の断片の中で、P.2901が一番掲出語の数が多い。1935年に神田喜一郎はパリで原本調査を行った上で、P.2901は『玄応音義』の一部分であることを初めて指摘した。それに続き、姜亮夫(1941)は、内容について多くの漢籍から採られていることを指摘したが、「不知為何経音義」と述べ、『玄応音義』との関係を解明しなかった。その後、潘重規(1972)が姜氏の研究に続き、一部の釈文を訂正し、増補を行った。P.2901の内容について、姜氏と同じように「不知為何経音義」と論じた。現在では、P.2901が玄応音義の一部であることがほぼ定説になっている。石塚、池田両氏の研究(1991)によって、P.2901は八世紀中期に成立した写本であることが明らかになった。

⁵ 上田(1981)が対校に用いた諸本は次の九種である。大治三年写本、平安朝写本(正倉院本)、広島大学所蔵本、天理図書館所蔵本、敦煌本、高麗本、磧砂藏経本、叢書集成所収本、慧琳音義所拠本。

一方、音韻研究において、竺家寧(1998)、葉鍵得(1999)両氏が P.2901 の反切を抽出し、『広韻』、『玉篇』などの資料と比較し、「知識人が当時の発音に基づき、成立した音義辞典。またよく使われる辞典の可能性が高い。(可以推斷本卷實為當時讀書人按當時語言唸書の音義詞典，很可能是一部放在手邊的參考工具書)」との結論を得た。

徐時儀氏(2005)は敦煌本の P.2901 を高麗本と中国の磧砂本と比較した結果、P.2901 が書写された時、省略が行われたことを解明し、一方で、磧砂本に見られない 21 部の経目が P.2901 にあることも指摘した。張金泉(1998)は P.2901 と玄奘音義諸本の関係を次の 3 点にまとめた。
①P.2901 全文が玄奘音義に見られる。②P.2901 は全般的に書写せず、部分的に掲出語と注文を採録した。③P.2901 の経目数は 102、項目数は 354 である。さらに、張娜麗(2012)は P.2901 について書誌学の考察を行い、さらに経目が乱れる原因を解明した。すなわち、経目は旧訳『俱舍論』→旧訳『俱舍論』批判論⁶→新訳『俱舍論』という順に沿って配列されているという。その後、全文翻字を試みた。結論として、P.2901 の抄録方針が「原掲出語をそのまま襲い、注釈をさまざまな形とするもの」と「原掲出字の二文字の一方を取り、注釈を施すもの(計 39 例)」という 2 点を指摘した。

范舒の修士論文『吐魯番本玄奘「一切經音義」研究』は、吐魯蕃地域から発見した 12 点の玄奘音義断片を研究対象として、翻字と校合を行った。まず、断片の発見場所、書写形式、行数、経目名とその断片に関する先行研究を紹介した。次に、断片の内容について翻字した。最後に、高麗本と校合し、吐魯蕃本玄奘音義を校勘する。高麗本以外、また金藏広勝寺本、毗盧藏本、磧砂藏本、永樂南藏本、永樂北藏本、宛委別藏本、叢書集成初編影印海山仙館叢書本、日本の金剛寺本・七寺本・西方寺・石山寺と敦煌本を参考資料として利用した。范氏は現存する玄奘音義諸本に基づいて吐魯蕃本を校勘するのみならず、さらに、成立年代が古い吐魯蕃本を利用して現存本を校正した。

このほかに、張金泉・許建平の『敦煌音義匯考』、張金泉の『敦煌佛經音義寫卷述要』では玄奘音義敦煌・吐魯蕃断片群にも言及している。

11 おわりに

以上述べてきたように、玄奘音義中国版本の研究については盛んに行われているものの、新出の日本古写本についてはほぼ研究されていない。よって、今後上田(1981)以後に紹介された日本古写本である七寺本・金剛寺本・西方寺本・東京大学本・京都大学本を含め、9 種類の

⁶ 批判論については張麗娜(2012)が次のように指摘している。卷二十五所収の『阿毗達磨順正理論』は、世親造の「俱舍論」を衆賢(Samghabhadra)が批判した論著(『俱舍電論』と称したものを改め「順正理論」としたもの)、玄奘三蔵が漢訳したものである。

玄応音義日本古写本を対象として、以下の点を検証する必要がある。

- ① 中国版本の磧砂本、日本に現存する版本の宮内庁本(開元寺本)、高麗本、慧琳音義の玄応撰部分を利用し、日本の9種類の玄応音義古写本を系統分類する。
- ② 中国版本と校合し、日本古写本の誤写誤脱を校勘する。
- ③ 日本古写本独自の音注を分析し、改編であるか誤写であるかを明らかにする。改編の場合は、その発音の成立原因を検討する。
- ④ 語彙については、日本古写本のみにある掲出語について、なぜ日本古写本に見られるのかを検証する。
- ⑤ 日本古写本諸本間で異なる内容については、増訂であるか省略であるかを検討する。その上で、相異のある内容の出典を明らかにする。
- ⑥ 玄応音義敦煌・吐魯蕃断片群の成立年代が日本古写本と近いとため、日本古写本を利用し、敦煌・吐魯蕃断片群を校勘し、断片群の特徴の解明を試みる。

(り ないき・言語文学専攻)

参考文献

中国語著書

- 陳垣(1962)《中國佛教史籍概論》中華書局
陳士強(2000)《中國佛教百科全書》上海古籍出版社
丁福保(1994)《佛學大辭典》上海書店
董志翹(2000)《中古文獻語言論集》巴蜀書社
方廣錫(1997)《敦煌佛教經錄輯校》江蘇古籍出版社
黃仁瑄(2011)《唐五代佛典音義研究》中華書局
黃涇伯(2010)《慧琳一切經音義反切考》中華書局
季羨林主編(1998)《敦煌學大辭典》上海辭書出版社
姜亮夫(2002)《姜亮夫全集(九)・瀛涯敦煌韻輯》雲南人民出版社
江藍生、曹廣順(1997)《唐五代語言詞典》上海教育出版社
蔣禮鴻等(1994)《敦煌文獻語言詞典》杭州大學出版社
蔣禮鴻(1997)《敦煌變文字義通釋》上海古籍出版社
蔣紹愚(1989)《古漢語詞彙綱要》北京大學出版社
羅常培(1963)《唐五代西北方音(上海中華民國22年刊の影印)》東京大安出版社
李富華、何梅(2003)《漢文佛教大藏經研究》, 宗教文化出版社
梁曉虹(1994)《佛教詞語的構造與漢語詞彙的發展》北京語言學院出版社
梁曉虹、徐時儀、陳五雲(2005)《佛經音義與漢語詞匯研究》商務出版社
劉葉秋(1983)《中國字典史略》中華書局
林玉山(1992)《中國辭書編纂史略》中州古籍出版社
潘悟雲(2000)《漢語歷史音韻學》上海教育出版社
潘重規(1972)《瀛涯敦煌韻輯新編》香港新亞研究所

- 潘重規 (1978) 《敦煌俗字譜》 石門圖書公司
錢劍夫 (1986) 《中國古代字書辭典概論》 商務印書館
唐蘭 (2005) 《中國文字學》 上海世紀出版集團
田潛 (1924) 《一切經音義引說文箋》 (田氏) 鼎楚室
王力 (1981) 《中國語言學史》 山西人民出版社
王力 (1993) 《漢語詞彙史》 商務印書館
王華權 (2011) 《〈一切經音義〉 刻本用字研究》 廣西師範大學出版社
王雲路, 方一新 (2000) 《中古漢語研究》 商務印書館
徐時儀 (2005) 《玄應 〈衆經音義〉 研究》 中華書局
徐時儀 (2008) 《〈一切經音義〉 三種校本合刊》 上海古籍出版社
徐時儀 (2009) 《玄應和慧琳的 〈一切經音義〉 研究》 上海世紀出版集團
嚴紹璁 (1992) 《漢籍在日本的流佈研究》 江蘇古籍出版社
于亨 (2009) 《玄應 〈一切經音義〉 研究》 中國社會科學出版社
姚永銘 (2003) 《慧琳 〈一切經音義〉 研究》 江蘇古籍出版社
趙振鐸 (2000) 《中國語言學史》 河北教育出版社
張涌泉, 黃征 (1977) 《敦煌變文校注》, 中華書局
張金泉, 許建平 (1996) 《敦煌音義匯考》 杭州大學出版社
張涌泉 (1996) 《敦煌俗字研究》, 上海教育出版社
周祖謨 (1988) 《周祖謨語言文史論集》 浙江古籍出版社
朱慶之 (1990) 《佛典與中古漢語詞彙研究》 文津出版社
范舒 (2012) 《吐魯番本玄應 〈一切經音義〉 研究》 浙江大學碩士論文
耿銘 (2008) 《玄應 〈衆經音義〉 異文研究》 上海師範大學博士論文

中国語論文

- 韓小荊 (2007) 《試析 〈可洪音義〉 對 〈玄應音義〉 的匡補》 《中國典籍與文化》 (4)
黃仁瑄 (2003) 《玄應 〈一切經音義〉 中的假借字》 南陽師範學院學報(7)
黃仁瑄 (2005) 《慧琳 〈一切經音義〉 中的轉注兼會意字》 語言研究(2)
黃仁瑄 (2006) 《玄應 〈一切經音義〉 中的近字》 語言研究(5)
黃文弼 (1954) 《吐魯番考古記》 中國科學院
劉安志, 石墨林 (2003) 《〈大谷文書集成〉 佛教資料考辨》 《魏晉南北朝隋唐史資料》
劉安志 (2004) 《〈大谷文書集成〉 古籍寫本考辨》 《新疆師範大學學報 (哲學社會科學版)》 (25-1)
落合俊典 (2000) 《寫本一切經的資料價值》, 《世界宗教研究》 (2)
聶志軍 (2013) 《日本杏雨書屋藏玄應 〈一切經音義〉 殘卷再研究》 《古漢語研究》 (1)
榮新江 (2005) 《中國國家圖書館善本部藏德國吐魯番文獻舊照片的學術價值》 《敦煌學國際研討會論文集》
王力 (1982) 《玄應 〈一切經音義〉 反切考》 《語言研究》 (2)
許建平 (2011) 《杏雨書屋藏玄應 〈一切經音義〉 殘卷校釋》 《敦煌研究》 (5)
徐時儀 (2004) 《玄應 〈衆經音義〉 所釋常用詞考》 《語言研究》 (4)
徐時儀 (2005a) 《玄應 〈衆經音義〉 的成書和版本流傳考探》, 《古籍整理研究學刊》 (4)
徐時儀 (2005b) 《玄應 〈衆經音義〉 方言俗語詞考》 《漢語學報》 (1)
徐時儀 (2005c) 《敦煌寫本 〈玄應音義〉 考補》 《敦煌研究》 (1)
徐時儀 (2009a) 《玄應 〈一切經音義〉 寫卷考》 《文獻》 (1)
徐時儀 (2009b) 《〈一切經音義〉 與古籍整理研究》 《古籍整理研究學刊》 (1)

- 徐時儀 (2009c) 《略論〈一切經音義〉與詞彙學研究》《陝西師範大學學報》(3)
葉鍵得 (1999) 《巴黎所藏 P.2901 敦煌卷子反切問題再探》《台北市立師範學報》(30)
于亭 (2007) 《玄應〈一切經音義〉版本考》《中國典籍與文化》
竺家寧 (1998) 《巴黎所藏 P.2901 敦煌卷子反切研究》《聲韻論叢》第八輯
張金泉 (1998) 《P.2901 佛經音義寫卷考》《杭州大學學報》(哲學社會科學版) (1)
周祖謨 (1996) 《校讀玄應〈一切經音義〉後記》《問學集》中華書局
周法高 (1948) 《從〈玄應音義〉考察唐初的語音》《學原》(2-3)
周法高 (1984) 《玄應反切再論》《大陸雜誌》(69-5)
周法高 (1987) 《玄應反切考》《中央研究院歷史語言所集刊》中華書局 (第20冊)

日本語文献

- 池田証壽 (1991) 「図書寮本類聚名義抄と玄應音義との関係について」『国語国文研究』88号
石田茂作 (1930) 『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』東洋文庫
石塚晴通・池田証壽 (1991) 「レニングラード本一切經音義——Φ二三〇を中心に——」『訓点語と訓点資料』86集
上田正 (1981) 「玄應音義諸本論考」『東洋學報』第63卷第1・2号
太田齊 (1998) 「玄應音義に見る玉篇の利用」『東洋學報』第80卷
小野玄妙・丸山孝雄 (1999) 『仏書解説大辞典』大東出版社
神田喜一郎 (1933) 「綴流の二大小学家——智騫と玄應——」『支那学全集』第一卷
小林芳規 (1981) 「一切經音義解題」『古辞書音義集成「一切經音義(下)」』付載
佐々木勇 (2014) 「玄應撰『一切經音義』卷第五における本文と目録との經名不一致について」『訓点語と訓点資料』133号
佐々木勇 (2016) 『広島大学新収石山寺本「玄應一切經音義」卷第十承安五年写本』『国文学攷』230号
広島大学国語国文学会
高田時雄 (2010) 「藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏」『敦煌写本研究年報』第4号
張娜麗 (2004) 「西域発見の文字資料〔四〕：『大谷文書集成』参読後笥記」『學苑』764号
張娜麗 (2006) 「京都大學文學部国語學国文學研究室藏玄應撰『一切經音義』について」『日本古寫經善本業刊第一輯「玄應撰一切經音義二十五卷」』國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會
張娜麗 (2012) 「敦煌本 P.2901 について」『論叢：現代語・現代文化』(9)
西脇常記 (2002) 『ドイツ将来のトルファン漢語文書』京都大学學術出版會
箕浦尚美 (2006) 「金剛寺本・七寺本・東京大學資料編纂所・西方寺藏玄應撰『一切經音義』について」『日本古寫經善本業刊第一輯「玄應撰一切經音義二十五卷」』國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會
矢放昭文 (1979) 「『慧琳音義』所収『玄應音義』の一側面」『均社論叢』
山田孝雄 (1925) 「一切經音義刊行始末」『一切經音義索引』西東書房